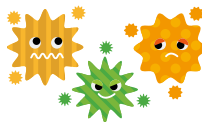


事例から学ぶ /

感染症対策



【執筆者】

堀 成美

ほりなるみ

国立国際医療研究センター 客員研究員
東京都港区感染症専門アドバイザー

神奈川大学法学部、東京女子医科大学看護短期大学卒業。
2009年国立感染症研究所実地疫学専門家コース（FETP）
修了。同年聖路加国際大学助教、2013年より国際医療研
究センター感染症対策専門職、2015年より国際診療部医
療コーディネーター併任。2018年8月より現職。

第12回 | 新型コロナとワクチン接種

感染症予防の一番の武器はワクチンですが、有効だからといってすべての感染症に対してワクチンを作れるわけではありません。例えば、多くの人が必要としているエイズ（HIV）やノロウイルスのワクチンは、たくさんお金と時間をかけてもまだ開発できていないのが現状です。



新型コロナウイルスのワクチンは、世界では2020年末から接種できるようになりました。これは開発の面でも実施の面でも、今までにないスピードでの展開となっています。何かを省略しているわけではなく、「急いで！」と本気になればこんなに早くできるのだということを知りました。「早過ぎてアヤしい」というより、「他のワクチンももっと早く対応できるのでは？」という疑問が湧きました。特に日本では海外で承認されたワクチンの導入が遅く、日本国内での承認申請から実際に私たちが接種をしてもらえるようになるまで、数年単位で遅れが出ています。今回は数カ月遅れての導入ですが、皆の努力で追いつくことは可能です。



もともとワクチンの目的は大きく2つあります。感染しないこと（予防）と、重症化の予防です。

罹患後に回復したとしても、後遺症が残るリスクがあるような感染症の場合は、特にワクチンでの予防が重要になります。

2020年末に接種を開始した国では、多くの人が接種することを選択しました。ちょうど感染者が増え、死亡した人の数が毎日報道されている頃で、なんとかこの感染症に勝利したいという個人や社会全体の気持ちも高かった時期です。実はこのような気持ちや空気はずっとは続きません。皆で対策をがんばった結果、感染する人の数が減り、またそれに伴い報道も減り、関心も低下します。「もう終わったんじゃないの？」という言葉も聞こえる中で、この社会の宝ともいえる予防の武器を、私たちの社会ではどれくらい大切にできるかがカギです。



感染者の数が減っても、新型コロナウイルスが根絶されたわけではありませんし、もともと無症状・軽症の人たちは自分が感染していることに気づかないまま生活しています。このようなウイルスを「無くす」ことはほぼ不可能ですが、ワクチンを接種する人が増えることで「罹らなくなる」、他の人に「うつしにくくなる」という効果が期待できます。

医療従事者はその社会的なミッション、仕事上の感染リスクからも接種希望者が多いことがわかっていますが、次いで接種する高齢者のところでより多くの人に接種してもらうためには、子どもや孫世代が「どうか元気でいてほしい」と願い、伝えていくことが大切だと考えています。

ワクチン接種の際の注意点



接種する時は
上腕（肩）を
出しやすい服装で



接種したら15分は
会場で静かに観察



接種当日は普段通り
入浴してOK